

第1回 大学入試のあり方に関する検討会議への意見・要望

2020年1月15日 両角亜希子（東京大学）

(1) これまでの経緯の徹底的な検証を

検討事項に掲げられた4事項一すなわち、(1) 英語4技能評価のあり方 (2) 記述式出題のあり方 (3) 経済的な状況や居住地域、障害の有無等にかかわらず、安心して試験を受けられる配慮 (4) その他大学入試の望ましいあり方、になぜか含まれていませんが、このような事態になぜ陥ったのかの検証について本会議で徹底して行うと聞いて、悩んだ末、委員を引き受けました。この議論を行うことなく、上述の4事項について議論しても同じ過ちを繰り返すだけではないかと懸念しており、徹底した検証をこの場で行っていくことを期待します。すでに大きな問題として社会も注目しており、公開の場で、徹底した議論をすることが求められ、そのための場であると理解しており、微力ながら、精一杯かかわっていく所存です。

英語の民間試験、国語・数学の記述式の導入を土壇場になり、見送りましたが、そこで報道等されるようになった問題点については、何年も前から専門家の方々が指摘し続けてきたことであり、なぜ、そうした意見に耳を傾けることなく政策がすすめられたのでしょうか。文部科学省の方針撤回を受けて各大学での導入を直ちに取下げる動きが多く見られましたが、なぜ、その程度の判断を多くの大学はしたのでしょうか。今回の一連のプロセスには、反省的な視点から検証しなおすべき論点が多くあり、まずはそうした議論を丁寧に行うことが必要だと考えます。

今回の事態に至った背景について、私自身は、手段と目的の取り違えた、という問題は一番大きかったと考えます。大学入試を変えることで高校教育と大学教育を変える、という発想自体が混乱を招いたと思います。教育の課題は教育現場で解決すべきであり、それを入試で解決できません。大学入試は、大学を志願するものの中から大学が選抜するための仕組みであり、受験生にとっては将来の進路を左右する人生にとって重要な機会であり、そうしたマッチングが適切に、公正な形で行われることが重要であり、それ以外の目的を外部から押し付けられることがあってはなりません。英語の民間試験も、記述式テストも、それぞれの目的にそって使われるのであれば有効ですが、それを大学入試、しかも共通テストに使おうとしたことで、様々な矛盾が生じたと考えます。

また、そうした疑念は最初から多くの専門家が幾度となく指摘してきたにもかかわらず、政策的な議論に影響を与えず、土壇場になっての見送りという事態になりましたが、そうした政策プロセスについても、原因を究明することで、再発を防止する必要があると考えます。検討期間は1年の予定と聞いておりますが、1年でできる議論を越えている印象も抱いており、期限ありき、結論ありきにならないように、運営をお願いしたいと思います。

(2) 現場や専門家の声を議論に

今回の委員会では、推進派や反対派もバランスよく含めて議論を行うと聞いており、いろいろご配慮されてメンバーを選ばれたのだと思います。ただ、大学入試は多くの人にとって身近な問題ではありますが、それを適切に行うためには、様々な専門的な知見が活用されてきました。専門家の意見や現場の高校、大学側の声を聴き、それを取り入れることが必要だと思いますが、私も含めて必ずしもそうした委員構成になっていないように感じ、不安を覚えます。一言に高校や大学といっても、多様な課題と問題意識を持っており、共通テスト、という性質を鑑み、様々な現場関係者の声を拾う必要があると感じています。専門家については、一例ですが、大学入試の専門家である荒井克弘先生や大塚雄作先生、テスト理論の専門家である南風原朝和先生、英語教育の専門家である羽藤由美先生や阿部公彦先生、国語の問題であれば紅野謙介先生などがこれまでも説得的な議論を展開して、重要な論点は既に指摘されているように思います。検討会議で改めてそのお考えを発表してもらい議論をする機会を設ける、あるいはそれぞれの事項別のワーキンググループ・分科会等を立ち上げて、そうした専門家を交えた議論を展開するなど、現場の声や専門家の知見を聞きながら、今後の議論を進めていただけるように要望します。

以上